

1
80
9
8
7
6
5
4
3
2
1
70
9
8
7
6
5
4
3
4
5
6
7
8
9
10

猿蓑四歌仙解

全下

中村俊定文庫

文庫 18

802

2





猿蓑四歌仙解

卷三



鈴木荆山著



越後

水原

男野

梅校

仄叶楠の葉やミク利ヨシノヘ

丸犯

氣散も弓の弓をハラサギを至小の害セコモハ
す手の物音ミテ音をテナヒキテテナヒキテテナヒキテ
發弓せきたりキヌル一易まうん大矢ヲ初め
人子さす

何するよりて首廢まう秋

芭蕉

ゆうすとハあくさくゆみてかづけをかむる

主事より何の様を仰ぎやせと今宵と
あふと思ひあすればさきのうは山下え
主はゆめづらひと云ふてとあるとは是なり
主席されば座上福の主然と申すも只
呴きわらう事の意をきたれはちまかに主
との内格をもととすゆめづらひと云ふ事
令年自ら松床のさあ

かまつと子と都下盤昌の世はあると主
ゆめづらひを多きは主の人の事也
あくて世人十月は令紙のかまつ日本と云

是よりやがてたまよ示に

新車と名づけられ日承了

野水

言席もとあれハ何と多く事方用あり言便なり
たゞて主を名づけられあたながまも
主候おゆ一主ひの日承ふやたまこと
もあづれと仰り

是より前あらんと云ふれと言便はけ
たゞよハあらんと云ふれと云ふれと朝の用をな
月うけは主を名づけられ是まで盡
うち擇り算りて言席もととあるがくう室

たゞめなり

おもふうねー十のさゝほを

去來

何事もかくすあつて寝り有りけり候子なりれ
毛とすまくとは程ナシ前もさうの第入の玄関
もとえひどきを日影などり坐つてかづき
宿すところを心くらべゆくとてやまと室の
家残をもとほれりと、人情うつり
げとうふかのハ始人のあすうきれハ家共
四室なり

あらけとまうこゑうきりやとづく

三二

達今それいかぢうをき妙理をせずされ
さうみのくかきなり

手代修屋まわをまわくそひにて

蕉

十のまぢくもすののまなり日出度物を
あひひく數々寝ひらなり

夢のまよよひくを降

犯

うちひき谷をひて、今か初て吉経啼きたり
肩知手のきのすまきひて寝室をなほ
あれひくよひくをあひ利

け雪耳をしてまたとせに因をもてえ

のうすて居をまきたりとおきゆくかく

すあひスミモト

高きて肱よ幅よ喜のぬ

木

喜ぬのときもひ脛よ肱よあまるとふハ達くす
あり達くすアキラケナシテ上云文字無御て
とまくとふてくハ種あまく

喜のむせは身よ酒すちよけの船子猿さ
智人よあるあり是役を智人と下を拿
あくあすを種あまく喜のぬよ無
家がてとりひ渡すちのけの怪手とて役

三三

智人よとてゐあまのぬよ太刀のまよめ
ともそそて初めの人よとてえー深く考く
そそと解う志をくアユ夫してとゆよう
る事にとくへいきと詠歌よ晴とまく
岩大川の氣すと見よ同一は向てあり聲
聾人よとてすとてすとてたわいのく手に
ゆく

摩耶のうねよ雲のうね

水

是ハ象かくとも喜ぬいのれちよよ肱よ幅
したとくきハ摩耶山のうねよにほとく馬

上りあつてあくわせうへよくわがむね

そのあくまであるとなり

まえかづてかづすに食くハ風巻

丸

タめしといひ風うらうとのモタテアシノシ
むす年味有りうまきと喜んでほゆ
魚とそぞろひきこ集ふるの宿で驚
そぞろいかずのやうなうからモニのちりと
あきうれはまきうを被とたくすのと
足たりからまきに字鮮文まとさあくみがき
名とまことあらわすてこよハ情中の干あ

の鄰ぐゑる

蛭れりまかきて年味よき

蕉

是を春家をもく人天年面年みぬり
うねる雨やるかづくまよあすあつき節候
あふる年年ねく蛭れかくくびくらす
あすしふらすねく休ひりよ 久

ちりく

御まよまきハ雪みのるわおむいをゑ

体もとハ軽例を多く施れどもあくまでも
やうみてよしんじて西て身へやも
是梧桐樓走鳳皇枝に邊掃葉夕陽
傍のあんそひ

むまひさやき扇うりせよ

本

是前句よ柱の墨をかきて筆味よきとあり
」財を女の爲なり急ち男すアリなりごひ
其ノ墨反よりの外と又よ趣向をえまへ
まへき意れとす

金錫と人よ壁え身代やすき

茎

てよふく歌くに男の筆跡あアヤ一聲は武
士と宣ふう是を専付徳士のゆきます一叶
きくあたまくとゆひすとまくへねと何の
往いなきとほ尋ねまづれと毎日お
かく坐敷を下さんすと金錫とすをこの
人よき」と歌り

タキトナサガシカ多うのことをあるときばたみ
けよものとつぐて身ともき面盡すう
搖り半うて前句の歌よをへ渡してそれ、
すのうよ生ひを我にあまうる

襲風名好きの者への贈

犯

金鶴と呼ぶてゐる人されば彼は氣風も
さううとて風氣などおもひ、まともひを
下さるゝの日と二つ重ねてひどく、ハ
ひどくあくまで白羽をす

祥慶那の子孫よりタマの跡壁に
わが身もじむいせづき金鶴代白夷で
そな篠原さあくよ教う事ねども人を防
同一人をそんづきトイあめりかふと
人皆うか何とされば是生て世人同一人

三六

所内の秋も更り以て至るとき

木

是ハ容易難解難詳多々一以て其處
風呂又脣ぐの月とある、毎夜ある風呂多々
持主はは人足らず十人をもひもどくす
ありくはぬ用かうのううと見てうはる
宿のえをひきすうて音なる年風呂とあて清
きをめたり熱風名好きの人脣ぐとぞ風呂

りくらをうなぎるあひびと麻」とおじ
付は林すりは一軒のゆきふやゑうちの万さび
くまきと子さくやまうはゆるあひびすめま
けよなをあひれ風呂がつれ彷彿として而覺
真趣喰す因すうもしとおをうと御

五そくせ候すおまじ前句のまひま
前句の念をみてけすらわとて天より
孫すまう前句のすらすりとせうとば
それへこらえうそ前くま義理きゆう
リうれ猿轡の妙まとすこす

何をえうふとやうとうううなり
のまみかむかうえうのゆ 何をえうふとやう
とうううなり林と至りあと津きく時既なられ
さむともばあき誰うえ詠れういのううや林の
人へこらえうそ

茎

君とうう身を西念あこうもあく
君ハ身をよ取てまきを身よのけやす
たのるわ層とくに墳墓の地はあひ層と
层とハ藻人詞客の桂とうてに而念ハ法師
まく人の事半生れと深衣の水とあるハ君の

ちうと向一かえりまことにあるとふをうりあひ
旅の果ひみれあとふをうりあひ

木曾の旅著はすとくわせ

逃

旅著へ荷の根は茶蘇代をとて柄廢」とる
そ除けの内「生糸あり入へ荷の根を下」菜者
の一枝とく嘆いの意する事は「アモリ地」と云
をころとせんや後よみづをしてたゞ
この何れ食木曾よ店らきと見てたゞ木曾の
山路とてさううくる地和念の身乃ありま
せぢすうろー

うふやうけ佛と早雀
和念寺とく木曾よあくまつ早かよの五を
そくぬいあすすれつとよすよすすと
よすよすはきとあふー

東

山すすけひよばすすすまほまたやまの林
すきくはすすくすくと面おさへ自う知ゆふ
車一丸自往を賣びとこの舟持とをあら
云道あの船荷を取とさんや面食あり
里あるのまう殊よけあまめがまほぐ

冬のあれやせよや

化

寒きの夜の夢をうかうとすすきのあは
ねとあさう新^{ハシ}かへりとよでせを
おもひとまくゆくのねまち方様すとよもみ
我ハとまうはわふりとまうのをひる
人をそよぐ

旅の地をよすひーまく

蒸

山の孤は一舟をとひやまゆの原のあゆの
川をきみて冬のやんねすこくれいさきや
えらうへとまほしと肩ばかり船をりうら

三九

有能なつてやまとまもんのがあよ然
あつひゆく寝たまくねり

本

まきやうき女の嫁入りをまくて
テト女の嫁入り子へた女めどとひまつて
妻めどと一年二年をのせ年もみと母を
ぢりてうこす又陰根一連よせまくてひを隠
まきとおひきもじくとおりれをとひを隠
れとおちととすきそとせとゆとくみとせ
おもひの女の寝ともあれと寝ふを
時一ゆゑいととまくに女の嫁入りと

あまくとし

何おもひよ狼のあく

水

ほれよ狼のを吼えをすゑあらへ然念え
きてゆきよよううてたのすぬ狼のあき
やうきかみて叫となり

夕月夜忌の童稚の日麻ち

蕉

是ハモホ狼の吼えを何きの変すあつてすけま
とあれハ忌れ童稚の日麻ちりと厚と夕月夜
をすまけり

人リヨシキノ赤松翁のお

犯

三十

ヨウタナヒキタナヒテモモモモモモ
ヤホ人のあくせんすをすゑてすけハ詩の
わくすまをうと種種人をか一其のひ承
みは赤モのあもあうとすきハセキとす
とくに禽をひきそりあくす
うおもひよ自慢ひとせきわくと
ちくさみよまく居とうよい
スも大すの鉢をとくあ
うおほきハ小人うる人かりをえのたともしれ

末

も人のひやうるをうれううりあらもた
すみゆきたら難をどうかみうおはふく
せうのまやまくはうあま

丸

にたまの能をどうかほと何きハ酒人たの一
者をえくたうしなりけよおひしきのほ
子供をいきて林をどうさんむけよは
草がりたうはうとうう田のまきをさうたる
こそじときよまどま

初のくわうなまへまくまーまーのま
のうあまくはばのまきをかうまー

三三

か農のやうとよき社なり

蕉

さて經う田のまやまくとまどつは
何きあまくはうとうとけむ上と下とあか農の
方のまくはー都まかくすをては
人をひやうたうとまくはうとくは
か農のやうとよき社なりとくはまくは
そとむく

あううの風がうとくはまくは
わ夷りばか音へうううめくはあか農のけふ

末

名を用あそびり秋葉名を賣あまへがふ村
も御あきらめ仕事くうよむち庵がた
あくと有れ、銅やとらやと穿ひまで是事
につまひくまくま自子アシモドリ

あやとせを店走

お

おにゆのをどうのとぶ、内壁乃様わは貴、
天原の老母孝す玉堂と字とも休すを延年

モテムズク

星代多喜経の身せたすよ

蕉

多喜延連の身せ今生も大物後生と有

三十二

あやしくおよ蘭の身よくえ

危

星代多喜おどハ心もくおのづ、ふくらみの性情
ほんの、蘭草の生へたあらくみせやく
まく狭りあくまきてたの因通の風姿却く
人すも安くてととほじ年はされ葉人の
おまへあり

金ちやう後一たんよ喫よ前

本

あやしくおどてもね年のはじへうとまく
側もよしらう喫をみぢく枝す本すよす
きのこ

まちがくすあづまのと

かわうや今ハソシキあす花の三百密のと
ちり

ほ、やうをもみのけ解一巻白みみは格

猿蓑四歌仙解卷三

三十三

猿蓑四歌仙解卷四

越後 水原 鈴木荆山著
男野梅枝

饑乞弱東武行

乙丑辛未庚子あり一人テヒ翁と因居
きをすとぞとぞ

柄うちれありこの名れども叶

ひのとりりもああたぢねそむすうかのすり
この處のどうけいさうんをおうみます
ほーりと

ほーりと

筆あらへしを春の日午日

乙局

是ハおのすとゆく者比そ金のふれりく装ひ
粧を落をありのまに夕下にり發白玉對

一枝移たり

ひとりをすす田よおおこうされや

玲瓈

發白玉そのひ柳てすとあくよ三つ趣向參
重叶節と定め暖玉ハ二月上旬から後ハ育下旬
天つまき傳きゆか一にうり珍君もく行
アホれどもひとりはもやをまわうむ想りと
さく晴らす柳葉で小田よおおも干かとと

四一

玉のうち一き耕也の田のをのこすれハ
耕也人よかまよかま一匁あくたよまくひつち
おれすとよ會

さとを詠あて下されより

嘉實

さとを文字養持と又申ひとうすす前よ
お夢うち表家の方の肉の匁ハ市よまくか
またたれれおれ末が以て餘あひ是表
をやくとおのや往ひるるあり
かくすすすむ墨がえくの月

及

是ハかきとひばす中設られハ皆内子居合

きりなり又居ぬありあや射夕の人数半
とく者多キ利一人たぬかよだらむてぞ
きもせ一通うよどふとすて序陽ニ神に鳥
かれて、青々として居る事あざうの月
いえと心附を乞ひた

二階の客室たれる林

蕉

是ハ隱義口歌心の内能中妙音ナリト虫
蟲のつともとハソモリアの声とあれ可也
二階の客室たれりを二階の客室と云
様の人されハヤミスムトモトモトモトモト

食事の事されとおれの事叶されとく
人よがまへきだより。れくむ風とども
かぢみるよりぬ人の情をひりありの
うよぬ人とおなれともあはれられ、ぬ人今
見えまわり

男

主射ちや角うちのあとハズアモサ
二階の客室好まく通路の角うちを多く
まみに仰ぎきりお寄りたまられハリ。ぬあ
ありの意の事よあつて喜かととあるや
こころなり

福の原史乃ちうぢきの

頑

お野へたらうのたちまちの傍あらへ承る
やゑの日はあうてをくそをせふ福の原もな
そのいはとよハへとゆくとすらぬとおれ

あうのあうけときあり

ほづくの初は越やすとくとま

蕉

福の原史のれうちうれはと何わらひ發い
しととされハ福の原史のれ吹く年秋も
いとくとあきうす林とすらどき、かじもみ
けあきうすまのひうんあくゆもとよち金く又

四三

高林のひうんを春家高化あまの附か一て
可あく人の發いまとあのひえんとよまとあさ
す風うねもたんのいは修年か風氣ひうとよま
ことひくま素あれとはあひの白ハ福の原
史の風を林すりと不立林す感す十翁ひふ
付方ちるア

ての翁の事火毛をゆうけたうち於席を
越やうう手を厭むやがいもゆやされ
ひとすり覺悟の身あれとも嘆余をひすり
ゆゑ

翁

若ひ者ハ筆と毛ものより一おなきやうに實験
毛もの内体ぢりとおもひよしの後わうに
毛紙うとこうが紙を手書きあらわすを
ひよこてはやのハ筆者やところのゆとか大
字筆のちをもく

再思筆はと子もたんと子もけにすをもく
されともたんとつへんやくすの筆はと
アモキあうてゆみかは筆筆を武つかむ
とき内筆紙と筆紙と前もたんと
あふあふのときをばくとんや筆筆

集の記述説疎密宣義はすりなすと
御の刻乃筆をに筆寫ふ西方

筆と有る筆旗をぢり一筆ハ物を筋る
器あり筆をほこと筆記をすらん字筆が
くるとあやまびぢりておゆく付のこり一筆
一ト急戰傷と歎き殊々切創がて峰安
あり

海きる松のさうなりを刺
御の刻を船のうち時事陣れ射ていまじ着合
とす一時こまね松とて主戦あらそ

あらう御方の形審むり

己の刻滅雖すりて申の刻よりうて教説
などと通脇軍出るもあれへいよ／＼
時既つまざ候もてはまく私とせ／＼
なり／＼

疾のれ薦られよみ附て

弱

あの妻母一かにまゆられのまよ下細あきうと
宣義を思えれハシタ／＼の貧乏人どもニ
よハ只空のとく村端だけをとだそ、
あれのこどりようが乃てあぢ／＼すみま

松の轡ちよよと萩扇とよとゑおわれハ二モ
すらのれ流おもひよせあうとの心を付さ
ふわく／＼

又おもひ轡きとあき／＼つれよまよまく
草／＼の地毛へ萩せれ、芦野井と
其の名をあきせれう草のまよよりて
さか／＼のすあう／＼つすひ／＼るやくに
よすむ／＼す／＼草叢集めをき
ほくまく達てスルへかくのことを幽玄を
笑ふとくも筋引のまよ伏たまひと

二三く付くものより靈宝ありさう
ありまくおと草庵の靈巖たつとぬ
蘆原より萬千もの一部り
智月
是に秋もまたに百千の枯木のはげ薄な
極て無むのよすとえりことふとひる
さと一弓をとだち頭向の白雲
情りよはゆとしと咲ゆ
百吉付林の山よりて坐林中とゆく
惺に時々とよけあへむむらむく
ゆきよしゆがの酒下
犯

荔

四六

物へたあよ歎うる心あはううかへとゆき
すとぬきそあの事事あるまにてよ
ぬあくくく

津の柄よ立毛うりとらねあれ

赤葉

ゆきよしよくぬかとあは下とあれハ仰々
ゆもじよかと人のてきくスルをとてあ
れ持の柄よ立毛うとく人あり

原すきちへか一草のぬ

犯

花のれいいくうるまに津の柄よ立毛
たまえきが一草のとく行あうか

葉半告ぬあまく所をまきぢよと全く
立ちつゝきよけの後乃け一きあ利

事のりよとまかてあるる鐘机

至高

経机也あつそちの鐘机の内よ經机とある
車一櫛筈ヒツモ卑俗ニシテ拉机とツヘ風
流なる工藝布リ松又五月の以テモ有毛公鳥
あともお本いニラモ年忌はまうをすと多々

時無し

店をとのふ体のよひア

是ハ古度櫛筈の付大脛のキマアをつれふ

本

四七

左のよきナリされ櫛筈ヒツモヤミヒ駆走ヒ
キタナリヨリ作のようふうヒハセシヒリ一太
勢のありハ初モヤモ車一車アの付キ体み
寄るリホトロのときハカウのもの寄モヨロの
くれ車よぬももつとももととす度合モ宗
モラウハセシヒリ一すととモ

汗ぬくしけゆきの体乃ヒ

支腰

終のよきナリゆきすととやうのああれば
ハシモのあア布ヒテラモとあくとをすとも
あくとまけぬじよけは体の系付

ありとゆなり

猿蓑の妻すと前鳥のかりよ一白竹を
ニモうるさくと一玉うれしも猿蓑をれ
めくの身は生て子けやうのこち知ふ
トとあくととく唯えを徳て苦辛アト
又社子美の坊よ罗更山は月残夜水略橋
車被詔此絶唱猿蓑の流傳前鳥の
うよ鳥付くとえくそれハ山は月のこう

トとく

コトノセセキ一き鶴の下

杜茅

四八

是身をさきまの嫁うり一きやうりて友
の娘乃あけやまくはい時の新志ハツカ
ちりあきのやどきまきまかくとけぬくひ
スノムテヨナホにさうのひとけひくあ若
人自みかねばになのうちなり

残

大猿よおもじくられぬととく
おの身をそれハ前鳥のまへりうるすとく
鶴なきおひきとあへせーととみがけむ利
おとねれびのととみあき

者

ぬきうみのとう音なき身ふくかぶ大猿あ

高をまよとすとまじけ及するなり

小刀の蛤より故ふ細玉箱

残

一年中やすまむうせまむうまくす妻子も
まのまくそれしならのまきせまく厄々をま
もともとちうまく一丁のか刀まく蛤り蟹
なれどと同く居てゆく

棚うたとよに六年の歌

園風

あはげをえれば何をもゆるをよをひと今
宵よきよれりあまくも六年もあま
よがけどもちうむきのまことわどつふり

こちやむとおれぬ子使ひも須磨の浦 猿維
是ハ薩人ノ須磨のあれを吟せんとあくはせよ
ありゑみてのくと極ひ三丁くびよ六年の歌
きて須磨のうちよあうる多よりまくす今
そぞとおのあはるよ同居するよくかと舞
おうなまよあはるよあれハ馬駕の使ひふ
自由の地をよしめへうき使ひしよしよ達の
手をもとくうちたまくとちもくああくさえ
だるうとよつとちう

お波广とよとよ櫛扇より揚物す地よ

のをみえどもあらう古今の書をとんだふ
よあくすこすとくかうともひうく
たまきねやくじへとくわ

むねうちあるをとる肩衣

袖

領テよけむれあれ、次すちとすまハ
やうととなりくもきよおらわの地ニ
金佛持すとあやしきサ合意する肩衣
庸人の風俗よく形宣セリとすア
はえしかをくも破れ高

風

むねうちあるを肩衣あらわち是をとる

四十

のもり風いくひきを破扇代要をとるきて

用ひ居て多なり

鷺洲袖をとむ志は日本

袖

かが破扇いうせとくねくよす袖をうるめ袖を
ほくまもし袖をうるめう月の夜なれハ吹け
涼しくておもろひ老の袖をとくさみ居

たりなり

嘆歌の隣りハちうき様ほひ

芳

テヨリくみきかとくすけそくと嘆の言す
八月の夜をきて鶯やつまをとく厚るやゑ

夜深よりうしろから風を吹き
喉がのとよく自分の力を代りよほす
立まざり

活かさぬとこそ老人風景

風

極てひの毛隣やゑおく文う教むなり
つきあひすれり身とこもんよまわる人を
活かそねとぞ別きめハあくじむと

の年老なり

形うき猪を草する會津室

危蘭

テ老んを人室中室の縁をうきたるのう

四三

又うめんの人衣形うき猪うきといふ
つやともいはねは後の數向吟うなり
彦吉かとお休のうり下放

史邦

是々素人のをせきうるをよあへに細う
匂きは事うきのうと共に甚異う
花うきうきのつれもますすに 駒山

駒山

彦吉かとおと子供うきをよむのをうけり今
年のつれい字うねの候のまさすねう
駒のたとえを降りる若葉

羽仁

二のうれとよすくぬの候の字うねう

雅はほき優吉のりあまとを深く風をく
もちとんこれ持の枝子崩れさむ凡
仙すよまきのけいをして春よりの格
なま

猿蓑四歌仙解卷四

